

神様のおしっこは金木犀のにおい

作——玉木サナ

生神様のおしっこからは金木犀のにおいがする。
わたしはそれをかぐのをやめられない。

「廁は一階にあるので、ミルガが三階の部屋を出て階段を下りてくれば足音ですぐにわかる。ケナに気取られなくらいの頻度で、わたしはミルガが用を足したあと、すかさず廁へ行くことにしている。そこには、金木犀のにおいが満ちている。

わたしはそれを、鼻孔を通じて思う存分に吸い込む。
胸が、頭の中が、体中が、多幸感に満たされたようになって、くらくらす。甘ったるい、人を惑わすような、蠱惑的なにおい。

生き神ミルガの尿は金木犀の芳香を漂わせるといふ言い伝えは知っていたけれど、実際にこのにおいを嗅いだのはここへ来てからだった。気付いたのも、偶然だった。ミルガの後に廁へ入ったら、ほんとうに甘いあの香りがしたので、びっくりした。

わたしはそのにおいを嗅ぎながら興奮している。胸を高鳴らせている。

神様ってほんとうにいるの？

いるのかもしれない、だってここはこんなに甘いにおいに満ちているんだから。



することがない。

とにかく、することがないのだった。

ミルガの沐浴と着替えと化粧、それから食事の準備と食事とその

片付け。あとは衣服の洗濯。たまに往復六時間かけて町へ買い出しに行く。並べてみるとすることは結構あるように感じてしまうけれど、そんなことはない。三人分の洗濯なんて午前中にすぐに終わってしまつて、昼食を済ませればあとは日が暮れるまでただひたすら家の中でぼんやりして過ごすしかない。食事の準備も片付けも、必要なのは三人分だし作るものはほぼ決まっているのでほとんど手がからない。周囲には山しかなく、散歩も六日で飽きてしまった。ミルガは祭祀用の部屋で一日中瞑想をしている。ケナは神々へ救いを求めて祈っている。わたしは何もすることがない。

だから、考える。

神様はほんとうにいるの？ あの子は本当に生神様なの？ だったらどうして国と王を守ってくれなかったの？

外へと続く重い木の扉は閉じている。一階の土間に腰掛けて、膝の上で頬杖をつきながら、わたしはここへ来た日のことを思い出していた。

目を閉じると、歩き疲れた自分の息遣いと、ざっざっざっ、と地面を踏みしめる足音が聞こえてくるようだ。

五十六日前のこと。まだ夏の暑さが残っていた。あの時のわたしは——初めて生神様のその体を抱きかかえたことに高揚し、でも、抱えている腕も歩き通しの足も痛くて、ミルガと体を密着させている部分にじつりと汗が滲んできて暑くていらいらしてでも興奮してしまつて、だからそれらをすべて追い払うようにただひたすら同じことを、繰り返し繰り返し考えていた。

——神様ってほんとうにいるの？ いるとしたらどうしてわたしにはその姿が見えないの？ 声が聞こえないの？ わたしにはその資格がないから？

資格って、何だろう。